

市民による海外協力から得られたこと

「シャプラニールの実践から」

シャプラニールⅡ市民による海外協力の会

海外活動グループチーフ 白幡利雄

シャプラニールとは

本日は、お招きいただきましてありがとうございます。シャプラニールの活動について知っていただき、貴会の活動のご参考になればと思います。

まず、シャプラニールは、「市民による海外協力」を掲げ、そのミッションは、南北問題に象徴される現代社会のさまざまな問題、とりわけ南アジアの貧しい人々の生活上の問題解決に向けた活動を現地および日本国内で行い、すべての人々が豊かに共生できる地球社会の実現を目指すこととしています。市民活動としての海外協力にベースを置いています。ひとつの特徴として、海外

の現場ばかりでなく国内の活動の重要性を位置づけていることがあげられると考えています。

シャプラニールの設立は一九七二年ですから、三六年在経過しました。ただし、NPO 法人取得は二〇〇一年八月と他の団体と比べて、やや遅れました。シャプラニールは、特定の政治、宗教、企業、団体から完全に独立しています。活動の基本方針は、すでに述べたことと重複するものもありますが、以下のようにまとめられます。

- 当事者主体の原則
- 貧困住民のエンパワメントを目指して
- 社会から取り残された人々（最貧困層、マ

イノリテイ、障害者等）や課題に注目

■ 必要に応じて緊急救援活動を実施

■ 市民参加による海外協力

活動エリアは南アジアのバングラデシュ、ネパール、インドですが、パキスタンの地震やスリランカの大津波など自然災害の被災地域での緊急救援活動も行いました。三力国で活動を始めたのは、バングラデシュ一九七二年、ネパール一九九六年、インドが二〇〇六年です。

現在のスタッフは、日本人一五人、ベنگガル人二人、ネパール人四人ですが、ほかにパートナーNGOのスタッフは二〇〇人を超えています。また、会員は二四〇〇人、マンスリーサポーター八〇〇人、手工芸品販売協力者は約五〇〇〇人を数えています。現在のスタッフのうち二〇〇〇年以前からのスタッフは私を含めて三人で、あとは二〇〇〇年以降に採用されたスタッフです。ちなみに私は一九九三年からスタッフとして働いて

おり、この間、七年間バングラデシュ駐在を務めました。日本のNPOではスタッフの在籍期間が三年程度のところが多いともいわれていますから、比較的長期に勤めるスタッフが多いと言うこともできるでしょう。

マンスリーサポーターとは、シャプラニールの活動に賛同し定期的に寄付をしていただけの方々と、多くの方は口座自動引落として払ってもらっています。会員ではないので、自由に参加したり、やめたりができます。手工芸品販売協力者は、クラフトリンクと呼んでいる現地の手工芸品を日本国内で販売する際に協力してもらっている方で、そのしくみについては後で説明します。

予算規模ですが、二〇〇六年度の総収入は二億一九五七万円、九〇年代から大きくは変わっていません。収入内訳は以下の通りです。会費と寄付金はほぼ半々の割合です。国内活動収入はイベントやスタディツアーの収入です。

■ 会費・寄付金

四四%

■ 政府補助金、民間助成金等 一六%

■ 手工芸品販売、国内活動収入等 四〇%

事業費の構成比はおおむね下表の通りです。クラフトリンクでは、手工芸品の買付け、スタッフ人件費、倉庫での保管の費用などがかかります。国内活動は、あとで述べる地域連絡会が企画する講演会などの経費です。

一・シャプラニールの海外プロジェクト概要

三つの活動国での活動内容は以下ようになります。

バングラデシュ

1 農村部では、シヨミティ活動^(注1)を通して貧困層の生活上支援、エンパワーメントを図っています。この活動では、村人が積立を行い、そのなかからマイクロクレジット^(注2)として貸付も行っています。また、ソーシャ

ル・ワーカーを雇用

し、飲料水やトイレを含めて定期的に啓発活動を行ったり、成人識字教室を行ったりしています。識字教室はシヨミティ活動の一環で、村人がやりたいと言ってきたときに、四ヶ月コースとして実施します。教材も独自に作っています。このほか、村で働く子どもたち、ワーキングチルドレンへの支援も始めました。

2 都市部では、ストリ

事業費の内訳

	2007 (%)	2006 (%)
海外活動費	43	41
クラフトリンク(手工芸品)	29	30
国内活動費	10	10
広報	6	7
本部管理費	9	10

ートチルドレン支援のほか、二〇〇六年から
使用人として住込みで働いている少女への
支援も始めています。ストリートチルドレン
と違って家の中にいるので、困難さが見えに
くかったのですが、ヘルプセンターを作り、
雇用主の理解のもと、仕事に役立つ知識を伝
えたり、話し合いを通じて彼女たちの共通の
問題を把握したりしています。ストリートチ
ルドレン支援では、バスターミナルの近くに
ストリート・スクールを設けて授業を行っ
たり、二四時間オープンドロップイン・セン
ターという児童館のような施設を設け、子ど
もたちが仮眠をしたり、シャワーを浴びたり
することができるようになっています。ここで
はロッカーが備えられていて荷物やお金を
出し入れすることもできます。

ネパール

1 農村部では、貧困層の生活向上に配慮した地

域防災活動を行っています。ネパールでは、
最近の気候変動により洪水が頻発し、耕地が
流されてしまうことが少なくないうえに、燃
料として森の木を伐採してしまうという問
題が起きています。そこで、護岸工事した
り、防災ハザードマップを作ったりして被害
を最小限に抑えようとしています。

2 都市部では、ワーキングチルドレンの支援活
動として、読み書きを教えたり、巡回診療、
カウンセリングを行ったりしています。

インド

1 二〇〇六年からコルカタと周辺地区のみで
活動を始めたところで、まだ事務所も持って
いません。ここでは、在来種が減少している
問題を認識してもらうため、子どもたちによ
る環境教育への支援を行っています。

2 もうひとつは、家政婦の問題です。コルカタ
には、毎日郊外から片道二〜三時間かけて電

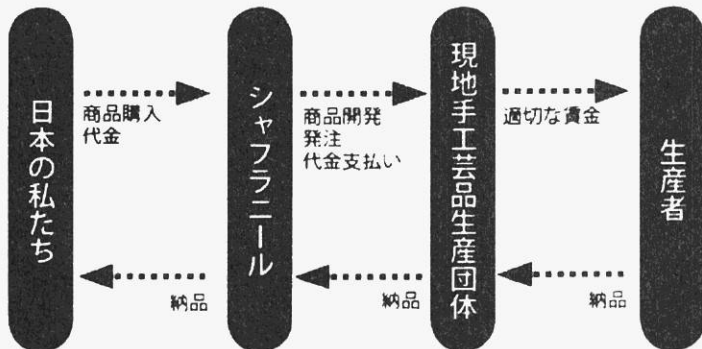
車で通勤し、数軒をはしごして働いている女性がかなりいます。その労働条件は例えば通勤途中の駅にトイレもないなど過酷な状況で、実態を把握したうえ、その改善を考えようとしています。

二. クラフトリンク

→ 手工芸品を通じた協力 ←

もうひとつの海外協力のかたちとして手工芸品を通じた協力、クラフトリンクがあります。クラフトリンクを通じて、手工芸品の購入や販売協力も国際協力への参加の仕方のひとつであると考えています。クラフトリンクには下図に示すような主体がそれぞれの役割を担っています。このなかで重要な役割を果たすのが、現地の手工芸品生産団体です。専門性のある団体で女性の仕事づ

クラフトリンクの循環システム



（出典）シャプラニール編「進化する国際協力 NGO」、明石書店、2006

くりを日指しているNGOです。手工芸品は、最初は「お涙ちようだい」的に買ってもらえるかもしれませんが、日が肥えた消費者に買い続けてもらうためには、専門性をともなう商品開発が必要ですし、需要をみすえた生産管理も必要になってきます。こうしたキーとなる役割を担うのがこの生産団体です。

そして、販売においては、後に述べる地域連絡会が大きな役割を果たしています。そのほか、販売を希望する団体に委託販売をすることもあります。さらに、日本で販売するのでから、こちらでアイデアを出して、向こうで商品化するようなことも行っています。

三、緊急支援活動

下表に示すように、シャプラニールでは自然災害被災地への緊急救援活動も数多く行ってきました。このなかで、バングラデシュを襲った九一

シャプラニールの緊急救援活動

バングラデシュ	サイクロン	85年、91年、07年
	大洪水	88年、97年、04年、07年
	ミャンマー難民	92年
	竜巻	96年
	寒波	06年
ネパール	元カマイヤへの食糧配給	03年
	中西部平野洪水	06年
インド	インド西部地震	01年
アフガニスタン	難民救援	01年
インド・スリランカ	インド洋大津波	04年
パキスタン	大地震	05年

年のサイクロンは一三万八千人の死者が出たのですが、そのサイクロン被害に対してのシャプラニールの救援活動がテレビ朝日のニュース・ステーションでも取り上げられ、その結果、多くの寄付金が集まるとともに、会員拡大の契機となりました。ミャンマー難民というのは、軍政の迫害を受けて、難民として流入してきたイスラム教徒の救援です。バングラデシュは、さまざまな自然災害の影響を受けています。そのなかには熱い国でありながら、冬には寒波で死者が出るようなこともあります。

カミヤというのは、ネパールで、生まれながらにして親の債務を引き継ぎ、債務労働者として一生を送る人たちです。法律上は解放されたのですが、十分な生活再建はできていないことから、食糧不足の時期に配給を行ったものです。ネパールでは、先ほど、地域防災活動と表現しましたが、氷河が溶け出すことで洪水が頻発する状況にあ

ります。こうした洪水の被災者を救援しています。

四. 活動の変遷

シャプラニールの活動の変遷を表にまとめました。バングラデシュは九ヶ月に及ぶパキスタンとの内戦を経て独立しました。この内戦において、犠牲者は三〇〇万人以上に及んだと言われています。復興農業奉仕団というのは、バングラデシュの港の倉庫にあった日本製のトラクターを提供して使い方を指導し、生産性の向上を図ろうというものでしたが、土壌が合わない、燃料が買えない、そして地主の農地を耕しても土地を持たない貧しい人を救済することにならないことに気づきました。これでは、気が済まないと考えた有志が立ち上げたのが、ヘルプ・バングラデシュ・コミティ(HBC)というシャプラニールの前身でした。

HBCでは、街頭募金を行い、バングラデシュ

シャプラニールの活動の変遷

1971 年	バングラデシュ独立、復興農業奉仕団
1972～74 年	街頭募金と現地への送金
1974～77 年	日本人が農村に住込む／手工芸品生産協同組合、青空識字学級など
1977 年 4 月 17 日	日本人駐在員 2 名への襲撃事件
1977 年～80 年	活動の模索期間
1980 年	村人の自主的なグループ活動、ショミティへの支援開始→ショミティ連合会への間接的な支援へ／日本での手工芸品販売を継続
1987 年	ショミティ連合会に雇用されていたワーカーをシャプラニールの直接雇用へ（99 年まで）
1991 年	サイクロン緊急救援、事務局体制の拡充、組織の拡大
1996 年	ネパールでの活動を開始
1997 年	ベンガル人によるダッカ事務所長代行体制への変化とストライキ事件
1999 年	地域活動センターのローカル NGO 化を開始→2005 年までに 6 つの村事務所を 3 つの NGO として再編、独立
2006 年	インドでの活動を開始

を訪問する例えば大学の冒険部の人に集まった募金を託し、現地で子どもたちにノートなどの文具を配ることを依頼しました。しかし、当時は勉強することよりも食べるのがだいじなため、翌日にはノートが市場で売られている現実を知ることとなりました。こちら側の思惑と現地のニーズがかみ合わなかった例です。こうした経緯を経て、七四年からは日本人が農村に住込んで現地の人と同じ生活をするようになりました。同じ生活をする中で、ニーズが見えると考えたわけです。

しかし、そのような経緯のなかで七七年に、襲撃事件がおきました。金を持っている日本人が住み

着くことで、既得權益を侵されると考えた有力者が、賊を雇って襲撃したと考えています。宗教対立のあるなかで、住込んだ日本人をクリスチャンと考える村人もいたという状況の中のことでした。幸い、襲撃から救ってくれたのも村の人たちでした。

その後模索期を経てシヨミティ活動を始めることになります。はじめは、ソーシャル・ワーカーを雇い、シヨミティ連合会へ資金を送るという間接的な支援を行いました。しかし、規模が大きくなるなかで、シヨミティ活動へ間接的にしか関われないということは、シヨミティがどういう状況になっているのか、ワーカーがどういう仕事をしているのか、渡した資金が有効に使われ、本当に生活が向上しているのかを確かめることができないことから、八七年には、シャプラニールがワーカーを直接雇用する体制をとり始めました。これは、採用、査定などの人事管理を含めて、直

接オペレーションすることでした。

こうしたなか、九一年のサイクロンは甚大な被害をもたらしましたが、シャプラニールの活動を日本で多くの人に知ってもらう機会にもなりました。その結果、八〇〇〇万円という寄付が集まり、寄付者を会員に勧誘することで、それまで八〇〇人程度だった会員が、一四〇〇人に増え、さらに新たな会員の紹介で会員数が四〇〇〇人と飛躍的に増えました。このころに、今と同程度の予算規模にもなりました。このため、事務局体制の拡充が迫られ、新たに損保会社OBで、NPOのマネジメントでMBAの資格をもつ方が事務局長に就任したりしました。

九七年には、ワーカーの直接雇用のため、ダツカ事務所長の仕事が多忙を極めるようになってきたなかで、所長が急に日本に帰ることになり、ベンガル人がダツカ事務所長代行に就任しました。比較的甘かった日本人の人事管理から、ベン

ガル人による厳しい人事管理へと変り、スタッフに不満といつ首を切られるかもしれないという不安が広がり、ついにフィールドのほぼ全てのスタッフがストライキに入るといふ事件がおきました。ストライキは二ヶ月で収束しましたが、一二〇人を超えるワーカーの直接管理には無理があると考えられたことから、九九年から村の事務所をローカルNGOとして独立させていき、パートナーNGOとして組んでいくという方針（パートナーシップ方式）を採用しました。

襲撃事件やストライキなど、いくつかの苦い経験を経て、今日のシャプラニールがあるわけです。

五、何が大切か

シャプラニールが大切に行っていることと、海外活動で大切にすべきと考えていることをお話しして、締めくくりたいと思います。

シャプラニールが大切に行っていること

1 質の高い活動 活動の質を評価し、これを向上、維持するため、プロジェクト評価を行っています。

本来何を目指していたのか、生活向上はどのくらい実現したかを計量しようとしています。そのために、ベースライン・サーベイとして五〇以上の指標、例えば寝る場所はどこか、食事回数などをプロジェクトの事前、事後（例えば五年後）に調査します。

何をもって生活向上と考えるかなどはいまだに試行錯誤の状態です。ただ、この手法がJBIC^(注3)の日に留まり、ノーベル平和賞を受けたグラミン銀行^(注4)への三〇億円の融資の効果を定量的に調査する業務を請け負うことにつながったりもしました。

2 自立性の高い活動 自己財源率七三％は維持することを目標としています。〇六年度は助成金が少ないこともあり、八四％になりました。これは、団体の自主性を確保するため

3

には重要なことだと考えています。しかし、資金繰りが難しくなる局面も考えられますので、みらいファンドという積立ても行っています。これは、シャプラニールとして自由に使えるもので、新たな活動を始めるときや困ったときに一時借用することができます。また、万が一解散したときの費用にも充てられます。

市民参加による海外協力 シャプラニールの意思決定は必ずボトムアップで、現場からの声を拾いあげてきました。日本のNGOでは、創設者が二〇年近くも代表を務めるような組織も少なくないのですが、理事、監事、評議員の任期制を定款で定めていて、二期六年で経営メンバーは交代します。また、多くの人が海外協力に参加できるかたちをさまざま考えてきましたが、地域連絡会というのがあって、手工芸品の販売や地域での講演会

の企画を行ったりしています。

4 情報公開 インターネットの有効活用、襲撃

事件など失敗例を含めた活動記録を出版して情報を公開しています。

海外協力で大切にすべきこと

1 **現場への理解、こだわり** 海外の現場では、言葉、文化、民族性が違うのに、私たちは自分たちの基準で考えてしまいがちです。現場では、我々の価値観とは違うと言う前提でないと、正確な理解、問題に対する正しい因果関係の把握は難しいと思います。

2 **継続した関わり** よく海外プロジェクトは、かつこよく「フェーズアウト」、「手を引いて現地に譲渡する」などの表現を使いますが、めったにそういうふうには進まないのが現実です。かかわってきたことの意味はそう簡単には見えてこないのです、途中で手を引いて

しまったらわからなくなってしまうことが多いのではないかと思います。長く継続的に関わることで見えてくるものは大きいと思います。

3 現地のパートナー（個人／団体）との価値観

の共有 折をみて我々の価値観も共有するようにしたいと思います。これは、ストライキの前にはできていなかったこととして、失敗から得られた教訓です。

4 そして、以上のことを実現するための組織、体制の確立です。

本日はご清聴有難うございました。

六 質疑

■ 送ったお金の使い道

シヨミティ連合会^{注5}へ送ったお金は七割がソーシャル・ワーカーの人件費に使われま

す。そのほか井戸を掘ったり、識字学級の先生の人件費に使ったりします。村の事務所などは、原則地域で提供してもらうようにしています。

■ 援助物資としての古着

数が揃わないと輸送コストが見合わないと思います。お金を送って現地で衣類を調達した方が現実的です。また、バングラデシュでは古着によって、病気が蔓延した経験があって、クリーニングされた証明がないと輸入できないことになっています。

■ フェアトレード

当初、シャプラニールのクラフトリンクでは、フェアトレードとは言ってきませんでしたが、世の中の趨勢から、「フェアトレード」ではないのかと問われるようになり、そう称するようになってきています。フェアトレード自体定義は明確でなく、認証を得ようとす

れば費用が必要で、こうした認証の動きは企業主導になつていてと考えています。シャプラニールのクラフトリンクの特徴は、生産の現場を見ているということにあると思つていますが、もっと大きなNGOは販売額が大きいけれど、全ての現場を見ているわけではないのではないのでしょうか。

■ ブラン・ジャパンの活動

ブラン・ジャパンのような特定の子どもの里親となつて支援することは、シャプラニールは考えていません。こうした支援は、見えやすく、分かりやすいために、資金が集まりやすいと思いますが、差別につながる危険性をはらんでいると考えています。

■ プロジェクト評価で生活改善は明確になりましたか？

五年ぐらい経過すると、放つておいたとしても全般に生活は変つてくるので、その変化

にプロジェクトの効果が隠れてしまうくらいがあり、効果を定量化することは難しい面があります。

■ バングラデシュでは、ごみの散乱がひどいので、観念的な環境教育の前にごみを捨てない、ごみを拾う運動をはじめたらどうかと考えていますが、可能と思いますか？

パートナーNGOのスタッフも平気でごみを捨てている状況で、実現性は低いのではないかと思います。

■ 日本下水文化研究会ではトイレを提供してきたが、将来的にも持続的に使われるようにするためには何が必要になるか、アドバイスがあればお願いします

作る前にじっくり時間をかけて、意識向上を図ることがだいじだと思います。そのためには、優れたファシリテータの協力を仰いでワークショップなどを行うこと、ローカルの

エリートを巻き込むことなども方法として有効だと思います。

二〇〇八年三月二五日（火曜）

TOTO スーパースペース・プレゼンテーション
ルーム（東京・新宿）

(注1) ショミティ 農村の生活向上のための相互扶助組織。これを支援する活動がショミティ活動。

(注2) マイクロクレジット 貧困層を対象にした無担保の小規模融資。グラミン銀行の「成功」を収めたことから、多くのNGOや援助団体が取り入れるようになった。

(注3) JBIIC 国際協力銀行。我が国の政府系金融機関で、二〇〇八年一〇月にJICAと統合する。

(注4) グラミン銀行 ムハマド・ユヌスが一九八三年に設立した銀行。マイクロクレジットを先行的に行った。グラミンとはベンガル語で「村落」の意。二〇〇六年ノーベル平和賞受賞。

(注5) ショミティ連合会 より大規模な収入向上プログラムなどを行うため、同じ地域で活動する複数のショミティの連合体。シャブラニールが設立と運営を支援している。

※ 編集者記：講演録作成にあたり、当日の配布資料並びに、シャブラニール編「進化する国際協力NPO」、明石書店（二〇〇六）を参考にさせていただきました。